

小規模学級（分校）での地域に根ざす社会科学習についての一考察 ～上神野地区でのへき地教育実践をもとにした安原小学校吉原分校の授業づくり～

A Study on Learning of Community Based Social Studies in Small Classes (Branch Schools)

西浦民子

川本治雄

Tamiko Nishiura

Haruo KAWAMOTO

(和歌山市立安原小学校・校長)

(和歌山大学教育学部・教授)

抄録:和歌山県内の小学校においてはへき地校における複式授業に代表されるような一学級のサイズが小さい少人数での教育が広くおこなわれている。近年子どもの数の減少に伴って、和歌山市内においてもこの傾向は顕著である。こうした現状にあって、以前からへき地校において取り組まれていた小規模学級での授業に関わって具体的実践を検討することにより小規模学級の特性を生かした授業づくりや授業展開についての効果的なあり方を提言することをめざした。

そこで、海南海草地区で実施した少人数での学校間交流を核とした事例を社会認識の育成に焦点を当て検討することにより、地域に根ざした授業づくりをおこなうことが効果的であることを検証した。教育内容を精査することにより「教材」を地域や子どもの生活の中に求め、保護者をはじめ、地域住民も巻き込んで授業づくりをおこなうことが重要であり、これらの学習経過や結果を他校との交流によって、より効果的に展開できることが明確になった。

キーワード: 少人数 分校 地域 交流等 学校経営

1. はじめに

和歌山市立安原小学校の校区である安原校区は、和歌山市の東南部に位置し、交通の不便さと市街化調整区域に指定されていることが、校区の急激な変容や市街化を遅らせてきた要因となってこれまで豊かな田園地帯を保っていた。しかし近年、県立特別支援学校、消防学校、私立女子短期大学、私立小・中・高等学校の設置や公共施設の整備に加えて、最近では、新興住宅の建設や農業道路、市県道の整備拡張などが進み、田園の減少と共に人々の意識や社会構造にも大きな変化をもたらしてきている。こうした中で、平成26年度は、児童数449名を抱え本校17学級、吉原分校3学級の編成のもとに学習活動がおこなわれている。

吉原分校は吉原・広原地区で構成され名草山東斜面の麓に点在し、メリヤス工業地帯として発展してきた地区である。最近、工場の数は減少しつつあるが吉原地区ではメリヤス業に従事している人が多く、広原

地区は兼業農家が多いという特色を持っている。

また、分校は明治30年11月に吉原分教場として吉原1167番地に設置され、110年の歴史を有し家族の誰かが分校で学んだという家庭が多く、保護者や地域の人たちは、分校の教育活動に対しては関心が高く協力的である。(図版1 吉原分校区略図)

平成19年には、文部科学省指定「人権教育」の研究を始め、平成19年12月に人権教育の発表会を開催した。また、平成20年には和歌山市教育委員会から「人権教育」の指定を受けている。平成26年5月現在の児童数は20名で、1年から4年が在籍し5年から本校の安原小学校に通学することになる。分校での学級編成は、1年生は1学級の6名、2・3年生は5名の複式学級(2年生4名、3年生1名)で、4年生は9名の1学級で構成されており分校全体では3学級で運営されている。いずれも少人数学級での教科及び教科外での活動になり、その教育内容づくりの活性化による教育効

果の高度化が課題となっている。

地区別児童数 H26.5.1 現在

地区		吉原	広原	計
1年	男	4	0	4
	女	1	1	2
2年	男	0	1	1
	女	2	1	3
3年	男	1	0	1
	女	0	0	0
4年	男	4	3	7
	女	2	0	2
計	男	9	4	13
	女	5	2	7
	計	14	6	20

豊かな自然環境に育った分校の子どもたちは、素直で、従順な子が多いという特徴があり、反面、少人数がゆえに少人数で全員が取り組まなくてはならない状況に置かれるため、作業などは真面目にこつこつと取り組む姿が見られる。また、異年齢集団では年上の子どもが年下の子どもの面倒をよく見るという優しい子どもの姿が見受けられる。しかし一面では、人間関係が固定化されることなどにより、子ども同士の多面的な見方ができなくなり、協調性や自主性にやや欠ける面が見られる。

こうした子どもの姿を、「地域の自然や人々とのふれあいを大切にする」、「学校内外での生活の実態を知ることにつとめる」「よくわかる授業づくりのための指導方法を工夫し、実践する」「どの子ども安心して自分の考えを話せるような学級づくりをすすめる」等の分校の教育計画の中の「具体的な努力目標」として教育方針（平成26年度）に掲げている¹⁾。

この取組をより実効あるものとして進めるために、旧美里町立上神野学校（現紀美野町、休校）での生活科・社会科教育実践を検討し、安原小学校吉原分校での学校づくり・授業づくりを進める基盤となる考え方や取組の方向性を検討する。

2. 上神野小学校（へき地での校区）と海南市立大野小学校冷水分校との交流授業に学ぶ

立地条件は違うが、海南市立大野小学校は、海南市街に位置している分校を持つ学校である。分校である冷水分校は海岸の漁業を中心とした分校区を有している。この冷水分校と上神野小学校の低学年は、毎年、生活科・総合的な学習の時間のなかで、カリキュラムに位置づけた「学校間交流」を継続しておこなってきた経緯がある。

1999年度（2000年1月）に「どの子ども伸びる研究会」の全国集会で授業を提供し冷水分校を会場に公開授業を実施した²⁾。

2.1. 日常の事実と子どもの認識

この取組を通して、1999年6月より開始した事前の公開授業についての検討会では、「校区の子どもたちの前に広がっている当たり前の日常の事実をどのように子どもに認識させるか」という課題が浮き彫りになってきた。見ているようで見ていない、聞いているようで聞いていないという日常の生活となってしまっている「ことがら」や風景・景観などは子どもにはもちろん、大人も又気づかない、気づきにくい傾向にある。

授業実践などを通して一定の結論を出したのは「比べること」（比較する）によって、具体的な事実や身の回りにある「ことがら」をより客観的につかむことができるということである。このことは、社会科学習が基本的な視点として重視している社会を見る視点としての「もの」「ひと」「こと（ことがら）」に接続することができる。また、こうしたことをとらえる学習活動として、「ゲストティチャー」を学校によぶ活動や現地に出かけていってコミュニケーションをしながら、そこで住み、生き、働く地域の人たちから直接の聞き取り活動を行うこと、さらに現地に出かけてのフィールドワークを行うことなど多様なアクティブラーニングが可能となる。

2.2. 「伝達すること」の授業展開への位置づけ

ここで注目したいのは、この取組の特徴は、人に知らせる「発信」という側面が、ものをとらえるためのフィールドワークや聞き取り等の調査やゲストティチャーとの関わりの前に設定され、子ども自身に意識化されているということである。つまり伝えたい相手が存在しそのために伝えたい内容をより多面的多角的な視点から収集しようという意欲形成が伴っているという学習全体の計画（しくみ）が、授業者と学習者双方に形成されているということである。この事実は生活綴り方（作文）教育の中でも大切な観点である。それは、伝えたい感動やそれにまつわる内容が子どもの側に存在することを第一の条件とし、そのことを伝える効果的な方法としての技法が存在するという事実であり、小学校段階の認識形成における生活綴り方教育では非常に重要な観点となるからである。

この取組事例を検討することによって導き出したものは、上神野小学校の子どもたちが伝達したい内容が、へき地である旧美里町の上神野小学校の棚田による米作りや柿栽培の果樹栽培に関わる地域の人の労働の姿であり、その中に息づく働く人の栽培に関わる具体的な技術であるということをもとに具体的な子どもにわかる事実で示すことが求められているということである。ま

た、労働の集中を少しでも緩和するための農家の人の工夫などにも目を向けられるような視点が新しく生まれきたことなども大切な伝えたい観点である。米作りと柿の栽培については労働集中のピークが、6月の田植えの頃と10月の稲刈りの頃である。田植えの忙しさの中で、柿(刀根ガキ)の摘花・摘雷の作業が必要であり、10月の秋の収穫時期が重なるという実態がある。米や柿の栽培カレンダーを作り検討することなどは具体的に労働の実態をつかむ手立てとなる。

一方、分校である冷水地区のそれは、冷水港を中心として展開されている漁業で働く人たちの姿である。漁船に乗って、遠くは瀬戸内海までも魚群探知機を使って移動し魚を捕らえる工夫などは、大人でも驚きと感動を覚えるくらいである。また、わかめの栽培もおこなわれていて、いわゆる育てる漁業(栽培漁業)の実態にも触れることができる。わかめの種付けからわかめが大きく育っていく様子を継続的にとらえることも地域の漁業に携わる漁民の協力を得ることによって可能である。冷水港ではわかめの出荷前の作業が行われていることを地域の子供もたちは目にすることができることから、具体的に働く人との関連で漁業の実態を把握することができる。

しかしなんといっても、砂浜に広がる「乾燥させるための台」がこの地区の漁業の仕事を把握する手がかりとしての「もの」であり、この地区の仕事の特徴を代表している「もの」であるというとらえ方ができる。一見しただけでは何か見当がつかない台であるが、この疑問を核にして単元全体を計画し、それぞれの1時間の授業が構成できると考えられるほど興味ある風景である。

つまり、見えるものを手がかりに普段目にするのでできない地域の人々の労働自体を把握するきっかけを作ることになる。この地区の上質の「しらすづくり」の原料として冷水港に水揚げされたカタクチイワシの子をすぐに人々の手によって釜揚げした状態から、乾燥させる場所となり、一連の労働の姿を追及していく重要な中心となる教材としての位置づけが可能となる。ここでは、しらすづくりの工程は言うに及ばず、その工程を支える働く人たちが及びそこで使われている単純な道具や機械は、生活科や小学校3年生の社会科学習には欠かせない地域の教材づくりの「核」となる教材である。

2.3. 年間を通した取組(郵便のしごとの観点を取り入れて)

カリキュラムに位置づけた年間授業計画上の授業としての取組の他に、日常の教育活動や日々の生活を綴ることによって日常の中で変化する事柄を記録し描くことは、生活綴り方の取組としても大切になってくる。それは、社会科や生活科さらに総合的な学習の中での

授業展開の中で重視されてきたが、改めて、書くことを通して社会認識を獲得していくプロセスに着目した実践に注目する必要がある³⁾。

冷水分校と上神野小学校との学校間交流は、毎年続けられていたが、その交流の仕方は年度ごとの担任の相互の相談により変化させながら、より子どもにとって効果的な方法を前年度や過年度の反省の上に積み重ねてきたものである。その中でも特に注目される取組が、低学年社会科(2年生)で取り組まれてきた「郵便で働く人」を参考にした取組である。

生活科がはじまって多くの学校で取り組まれたのが、「学校郵便局を作ろう」という趣旨の活動を中心とした実践で、自分たちの学校郵便をするために郵便局ではどのようにやっているかを見学に行くという位置づけでの取組であった。これは、同じように郵便局の見学をしているわけであるが全く目的が異なっている。郵便で働く人の労働の実態をつかむという目標と自分たちが郵便ごっこをするための方法を探しに見学するという目標の違いである。

上神野小学校の近くにも郵便ポストがあり、高台にある冷水分校のすぐ下にも郵便ポストがあるという郵便ポストの立地条件を生かして、郵便ポストに出された郵便物を収集に来る郵便局の人や学校や各家庭に毎日配達に来る郵便局の人に着目しながら自分たちの新しく発見した事実を互いに知らせ合う「文通」を学習の展開に位置づけていくことの効果を確認した。具体的には、年間を通して生活科や社会科の学習の節目、節目に知らせ合うことになるが、例えば春、夏、秋、冬のそれぞれの季節の変化をとらえ写真に撮って交流したり、発見カードに書いてコメントと共に送りあったりしたことの効果が、自分の校区や身の回りの生活をしっかりと見直す、見つけていくきっかけとなって、今までにはなかったおどろきと発見の場となっていくことは大きな効果であった。海近くの冷水分校の季節の変化を、山の中にある上神野小学校の少人数学級の子どもに伝えたことは、その内容自体が驚きや新たな疑問をふくらませていく契機となっていく。こうした取組の効果は一つの学校の中だけでは得られない効果であり、少人数であるが故の課題克服の大きなきっかけをつかむことにもつながる取組である。げんざいでは、ICT技術の進歩がめざましいことを受けて、低学年も含めてこのICT技術を使えば広くリアルタイムに学校間交流をおこなうことが可能となってきた。目標が定めれば、低学年であっても、グローバルな視点から日本語による海外の日本人学校との交流も一つの選択肢となる。

ここでは、郵便で働く人の集配を通して具体的に触れることができたし、郵便局の見学においても、郵便で働く人の仕事の内容を把握し、人々がどのように工夫しながら今のような郵便の仕事として進められてい

るのかについて見学の視点を持つことができるようになった。このことは、冷水分校の事例でいえば、海で働く漁業に従事する人々の具体的な働く姿に触れ新たな気づきを生む展開になっていることが重要であることを確認しあつた。

同時に、郵便で働く人においても実際の郵便局での仕事の見学を通して、自分たちが何回となく出してきた郵便物がどのような人々の手を渡って安全に又確実に届けられるのかという観点からとらえることが可能になっていったということの大切さを確認し、検討を進めた。

2.4. 年間を通した取組（相互訪問活動を学校・学年行事の中に位置づけて）

明らかにできたもう一つの観点が、学校行事や学年行事に位置づけた実際に交流している学校への訪問活動の有効性である。1999年度の事例でいえば年間を通して郵便物（文通）を通して交流してきた最後の仕上げの位置づけをもって2000年1月に上神野小学校から冷水小学校へ公共交通機関を使って移動し訪問をしたことである。冷水小学校での授業はもちろん、校区探検によって事前に学習してきた成果を総合的な学習の時間に位置づけて冷水小学校の子どもが冷水地域のポイントを上神野小学校の子どもに案内をし、説明をするというプログラムである。地域観光ガイドの取組に相当する興味ある取組である。

公共交通機関を使っての移動は、生活科の中での取組として広く定着してきている。大きな学校になると児童数が多くなるために親の協力を得て安全を確保しながら移動し、公共交通機関でのマナーを守ることや自分で切符を買って移動する経験を積むなどの移動そのものが目的となっていることが多く見られる。もちろんこのことは大事なことではあるが、何のために公共の交通機関を使って移動するのかという点では必然性がきわめて曖昧である。具体的には、上神野小学校の子どもは、冷水分校で子ども同士の交流をするために冷水駅に何時に到着し、そこから徒歩でどのくらい係って初めての冷水分校に行くのかという明確な目的が生じ、そこから、切符の買い方、バスや電車への乗り方、みんなが気持ちよく利用できるためのバスや電車の中でもマナー等を学んでいくことになる。これは、生活科におけるストーリー性の追究に他ならない。ともすれば、教科書記述に従って次から次へとぶつ切れになった単元を進めるようになってしまいがちな中で、関連性を持たせながら骨太のストーリーを追究する中で、内容を位置づけていくという生活科カリキュラムの「生活に根ざした再編成」が必要だということである。それは、子どもの生活を取り上げ生活に根ざした授業を進めるときに必要な組み替えであるということもできる。

この取組は、他の学年にも広げ発展的に取り組むことでより効果が上がる。滋賀県蒲生郡日野町立南比都佐小学校で取り込んだ「日野菜プロジェクト」では、日野菜の種を植え育ててきた途中経過をインターネットで日常的に交流することを通して、京都市立小学校が南比都佐小学校を訪問するという取組である。こうした実際に訪問し合うことの効果は非常に大きくインパクトのあるものとなっている⁴⁾。

3. 授業開発のための視点の検討

少人数での教育を生活科、社会科、総合的な学習などの社会認識に関わる群屋の取組を大きな視野で見てきたが、ここでは社会認識育成に関わって小学校3年生の地域めぐりを中心とした学習の発表の場としての子どもたちによる「地域めぐりフィールドワークガイド」の取組とコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の育成も視野に入れた授業の活性化について考察を進めたい。

冷水小学校でおこなわれた3年生による「地域めぐりフィールドワークガイド」の取組は、3年生の社会科学学習の地域学習の内容を押さえた学習成果としての意義があり、このガイドができる力を育てた取組に着目する。

この取組の前提は、少人数での学級における社会科としての教科学習を中心とした取組である。この点は非常に重要な観点で、総合的な学習が内容的な位置づけを伴わない目標設定をしたり、生活科における認識の前段階としての「気づき」をねらいとしていることとの違いである。そこで、地域学習における地域の問題について整理を試みる。

3.1. 社会科における「地域」

社会科としてはじめて学習を進める3年生の子どもの学習対象は「地域」である。4年生の学習も含めて「地域」を学習対象としての観点から整理すると次のようなとらえ方ができる⁵⁾

- (1) 地域には私たちが働きかける自然がある
- (2) 地域には生産労働があり働く人がいる
- (3) 地域には生活がある
- (4) 地域には矛盾がある
- (5) 地域には歴史がある

私たちが使う「地域」ということばは、一定の空間的領域を土台にもっている。しかしばらばらに取り出された空間ではなくそこには具体的に把握することのできる矛盾が存在し、その矛盾を克服しようとする人々の働きかけがあり、これらを通じて発展するという契機を含んでいる「場」だということである。また、中央に対する地方という意味でもなく、地域に生きる人々は矛盾を解決するために他の地域と関わり結びつきを深めながら矛盾を解決するための運動を進展させ

てきている。従って、行政区域を指しているものでもない。ここで改めて重視したいのが、子どもが生き、学び、遊び、成長する場であってその主人公は、地域に住む人々であるという事実である。

このような中で今日的な地域学習の子どもにとっての意義は次の三点に要約できる。

- (1) 子どもたちの地域離れ、生活離れが進んでいる中で、子どもが今住んでいる地域は、子どもの成長の土台であり、子どもを育てる力を持っている。
- (2) 地域に住む人々は、地域の課題と取り組み、生活向上のために運動を進めている。私たちはその人々と関わり学び合いながら、私たちのあり方を追究していくことが重要である。
- (3) 地域の課題と結びつけて日本の課題をとらえていくことによって観念的に陥らない具体的な地域の人々の動きを通してリアルに把握することができる。

このような意味において「地域学習」は重視される必要がある。

さて、神奈川の佐々木勝男氏は、著書⁶⁾の中で地域について次のようにまとめている。

- (1) 地域は、空間的な見方、方位、・方向の感覚を育てる
- (2) 地域は、働く人を介して生産労働の意味を教えてくれる。
- (3) 地域は、事実を通して矛盾や悩み、願いに気づかせてくれる
- (4) 地域は、事実を通して日本と世界に目を広げてくれる。
- (5) 地域は、歴史をはぐくみ、イメージの世界を刺激する。
- (6) 地域は、文化をはぐくみ、創造の喜びを与えてくれる。
- (7) 地域は、子どもの学習にとって限りない宝庫といえる。
- (8) 地域は、生活者としての主体形成の場である。

ここで取り上げられた八つの地域の持つ価値と意味は、子どもの現状を正しくつかめばつかむほど重要な意味を持つてくる。

3.2. 地域からの教材づくり

3年生による「地域めぐりフィールドワークガイド」の検討に当たり、重要な観点が、多様に存在する地域の事実の中からの教材としての選択である。茨城の鈴木正気氏は「地域とは、何よりも子どもたちの日常行為の場であるとともに、生産労働、消費生活が営まれる場である」ととらえ、「日常の世界と科学の世界を峻別しながらも、地域はこの両者が結節する場」ととら

え、子どもと共に教材をつくっていくことが重要であると主張している。私たちにとって、こうした地域の二重性から何を教材として切り出すかがきわめて重要な課題となる。

3年生のこの取組では、地域の中での生産労働を取り上げ、子どもと共に学んでいくことの大切さが浮かび上がってくる。それは、単なる遺跡や寺院仏閣についての解説ではなく、地域めぐりでの学習を通して獲得したシラス漁のことであったり、わかめの栽培やその生産に関わる技術や工夫であったり、地域の建物や道路の特色、家の建て方の特徴などであったり学習の成果としての内容を押さえることが大切になる。校区に存在する仏閣についてのガイドについても、祖父や祖母のお寺にかけける漁の無事を祈る過去の『悲痛な祈り』をも取り入れた学習の成果としての内容が盛り込まれ、生産に携わる危険と安全を祈る素朴な願いに触れていくというそこに住んでいる人からの聞き取りをとおしてまとめられガイドに結びついているという事実の重さもまた重要な観点である。

この観点は分校である吉原分校における授業づくりにも適用することができる。冷水分校や上神野小学校で取り組んだ地域の生産と労働に焦点を当てた取組は、地域働く人たちに焦点を当てた教材づくりが、少人数学級や複式学級での授業実践で効果的に生かされることになる。それはきめ細かな指導や援助ができるだけでなく子どもたち自身が地域にある「もの」や「ひと」に直接働きかけ、目に見える「もの」を手がかりに人々がどのように関わっているのかという目に見えない「ひと」と「もの」の関係をつかむことになる。

具体的に例示すれば、冷水分校区の人々がその地域で漁業を主たる産業としているのに対してメリヤス業であったり農業であったりという違いである。地域の教材は、子どもたちにとっても調査したり、聞き取りをしたり、フィールドワークなどによって確認したりすることのできる身近さだけでなく、より重要な点は、社会認識を育成する上での強みをもっていることである。

3.3. 本校安原小学校と分校との交流を軸にした展開

労働と生産を軸にして地域の事象をとらえると、子どものなかに地域の学習を通して「育つもの」が見えてくる。このことは、子どもが生活の中でとらえたことを綴るといふ行為を通して指導者に把握できる手立てとなり、子どもにとっては自己の認識の深まりの確認につながる。特にこうした授業展開の記録を手元に収集し、保存し振り返ることのできるポートフォリオ的な手法が有効である。このような手立ては、知ることを基盤にして、伝えることを意識化することによって、より明確に子どもの学習意欲を喚起することになる。他者、具体的には安原小学校の本校で学習してい

る仲間に伝えることによって得られる認識の高まりを創り出すことになる。つまり、日常の身近な世界（地域）を見つめ直すことによって得られる驚きを伴った発見の喜びが交流を通して再度呼び覚まされるのである。

このことは、上神野小学校の子どもたちが、冷水分校を訪問して柿の生産に関わって、柿の木の剪定や接ぎ木の技術、摘花や摘蕾の労働の集中、収穫後の世話、害虫対策や病気などへの対策（消毒）、除草等、冷水分校の子どもたちが知らない様々な労働の事実をまずは上神野小学校の子ども自身が把握し、伝えることを通して学習内容を再構成していくことに他ならない。

安原小学校の吉原分校でいえば、農業に従事している地域の人々が多い校区の広原地区であれば、野菜の栽培と収穫そして地域の農家見学等の学習を通して、地域の人への出会いと地域の人からの労働や生産に関わる『知恵』を学ぶことができる。

さらに、地域学習の一つのまとめとして、自分たちの校区の町めぐり地図の発表を相互におこなったり、「合同校区町めぐり地図」の作成にチャレンジしたりすることが可能となる。地図づくりを通して自分たちの住んでいる校区の特徴をフィールドワークや聞き取り等によって把握することが大きなねらいであるが、近年、地域の開発によって分校と本校の地区の特徴が急速に似通ってきているという特徴があり、こうした特徴を捉えるための聞き取り等、少し前の地域の状況と比較してみるというとらえ方も意図的に取り入れ学習の深化を図ることも重要な観点となる。吉原地区の特徴を中学年における地域学習の中で押さえるとき、住宅開発によって吉原分校区がどのような課題に直面し、その課題に地域の人々がどのような取組を進めているのかという視点は非常に重要な観点となる。

こうした点で「少人数」学級の特徴を生かし、子どもと地域の人々とを学習の中で出会わせ、分校と本校という校区の違いからとらえた地域の姿を交流し合うことの意義は大きい。つまり、分校と本校の交流による授業の活性化と視点の違いを軸に多様な見方の交流を図ることが可能となる。この取組は、校区の立地条件の特色をとらえた学習の安原小学校と吉原分校の学校間交流による地域に根ざした取組としての意義がある。

もちろん社会認識の育成に関わる取組だけでなく、社会認識や自然認識の基礎となる気づきを生む他学年での取組に生かすことができる。教科学習の分野では、生活を見つめることから自然認識や社会認識につながる気づきを生む生活科学学習の授業づくりとも重なる。春や秋に地域の行事としておこなわれるお祭りなど年中行事についての地域の人々の関わりやその違いに着目した交流教育の有効性も視野に入れることができる。

4. おわりに

学級のサイズが小さい少人数での教育では、考えや意見が同じようになり、多面的・多角的な思考の交流が少なくなり、刺激にかけることが指摘され、授業自体も平板なものになりがちなのが指摘されている。この傾向はどの地域にも少なからず見られ授業の活性化という点から課題になっている。こうした現状にあって、小規模学級での授業に関わって具体的実践を検討することにより小規模学級の特性を生かした授業づくりにおける教育内容や教育方法を検討してきた。

海南海草地区で実施した少人数での学校間交流（大野小学校冷水分校と旧美里町立上神野小学校）を軸とした実践事例は、社会科における社会認識の基礎からの育成や気づきを生む生活科の授業づくりに多くの示唆を与えるものであった。地域における労働と生産の視点から地域に根ざした授業づくりをおこなうことによって、効果を挙げる手立てを引き出すことができた。何を教える内容とするのかという検討から教育内容を検討することによって、地域の中や生活の中にある素材を教材として取り上げるための切り口を見つけ出し「教材」として授業の中に位置づけるのか検討することこそ教材研究であり、授業づくりを進めることになる。地域や子どもの生活の中にある事実から教材化することによって、その地域で生活する人々との関わりを重視して授業づくりをおこなうことが求められている。こうした授業展開の過程に注目すると共にその結果としての学習成果を他校との交流によって確かめ合い、学習過程を振り返ることによって地域の姿を事実 に即してとらえることの重要性が指摘できる。

注

- 1) 和歌山市立安原小学校『教育計画 -平成26年度版-』p. 115
- 2) 西浦は上神野小学校の授業者の一人として公開授業の事前検討会から関わり、川本は共同研究者として指導助言者として参画した。
- 3) 川本治雄「社会見学をどう考え取り組むか―書く活動を通して各自の考えの交流や内面化することの意義と方法―」『作文と教育』1996年9月臨時増刊号
- 4) 川本治雄・小嶋和宏「『日野菜プロジェクト』の取り組みの評価」和歌山大学教育学部総合実践センター紀要15号 2005年
- 5) 『授業の計画と実践』1980年4月刊あゆみ出版PP. 101-106
- 6) 『子どもとつくる楽しい社会科の授業』（明治図書1983年 P. 195）

参考資料

図版1 吉原分校区略図

吉原分校区略図



